

2021年度

三重大学 人文学部法律経済学科

特殊講義「協同組合論」



<第10回>

「世界の協同組合」

天野 晴元／日本生活協同組合連合会 国際部 部長

第10回（12月13日）：受講54名（対面11名、リモート43名）

世界には300万の協同組合がある。ICA（国際協同組合同盟）は、112か国318組織が加盟しており、世界人口の12%が協同組合の組合員である。また、協同組合で働いている人は2.8億人であり、世界の雇用人口の約10%を協同組合が創出しているのである。

また、国連では2015年に「持続可能な開発のための2030アジェンダ」を策定した。この中で民間セクターの多様な組織の一つとして協同組合への期待が寄せられている。

【第10回／講義の要旨】

- ・生協はイギリスで生まれ、アジアやアメリカへと広がっていったが、ヨーロッパでの広がりには大きい。スイスのミグロとコープスイスを合わせた事業規模は日本円で7兆円弱である。人口換算から見るとスイスの事業規模ははかなり大きい。海外の生協はスーパーやコンビニの事業が中心であり、宅配の事業は日本独特のものである。
- ・ヨーロッパの生協には、組合員以外の利用を制限する規制がないのも特徴である。また、最近では植物性食品がブームになっており多くの商品が供給されている。
- ・イギリスでは、食品などの小売りや旅行サービス、葬祭、保育園、電力小売り等、倫理性を重視した事業運営がおこなわれている。動物福祉やフェアトレード、社会問題に対する取り組みも特徴である。最近では、アマゾンと提携した事業等もおこなわれている。イタリアは、高い商品力を持ち、社会改革や消費者運動が熱心に取り組まれている。共にコロナ禍での生活弱者支援が積極的にすすめられている。「フードバンク・コミュニティ冷蔵庫」を設置し生活困窮者が自由に持ち帰ることができるような取り組みもある。
- ・スイスでは、ミグロとコープスイスで国内市場の70%をシェアしている。最近では無人店舗も展開している。フィンランドも国内市場の46%をシェアしている。スイスとフィンランドは流通に関わる全ての事業をおこなっているのが特徴である。スペインのバスク地方では、働く人と消費者がともに組合員として出資した特殊な生協もある。
- ・シンガポールは、オイルショックでインフレが発生し協同組合をつくる国策がとられた。韓国では、国産農水産物を重視する生協運動が盛んで食の安全や環境保護、倫理的消費が推進されている。アメリカとカナダは、協同組合大国であるが小さい生協と、信用事業をおこなう協同組合が多い点が特徴的である。
- ・世界では近年、環境面での食品のサステナビリティ評価や、カーボンニュートラル、プラスチック対策等に取り組む生協が増えている。また、様々な視点から暮らしの向上を図るための協同組合として労働者協同組合や、社会的協同組合、コミュニティ協同組合、小口金融融資協同組合などが設立されている。

第10回講義／受講生のレポート（抜粋）

- ・ヨーロッパの生協に関する市場シェアのスライドにおいて、繁栄度や幸福度が高いとされるスイスやノルウェー、デンマークの生協が市場シェアの多くを占めていることが興味深かった。福祉への強い関心を持っていることやその国における人柄に関係があるのだろうか。また、今回の講義では言われていないだけなのかもしれないが、各国の生協同士の繋がりがあまり感じられなかった。協同組合という性質上国同士の交流を必要としていないのかもしれないが、協力することでよりそれぞれの活動の質を高め、より良い組合となっていくのではないかと。
- ・他国にはコミュニティ協同組合や社会的協同組合といった日本ではあまり馴染みのない協同組合があることを知った。日本では公園や広場、歩道などにモニュメントを置いてホームレスの人々を排除しようとするところがあるという話を前に聞いたが、社会的協同組合のように社会的弱者を排除しようとするのではなく、共に助け合っていくことが大切ではないかと感じた。公営の住居が民間に渡り、家賃が高くなってしまふことを心配した人々が協力して、社会的協同組合を設立し、そのアパートを買い取ったという話を聞いて、家賃の安い公営住宅に住んでいた人々が急に家賃が高くなってしまふと、生活に支障が出てしまふ恐れもあるため、協同組合としてアパートの管理を行うことを決めたのは大きな決断だったと思う。協同組合の認知度があまり高くない日本ではこの考えには至らないのではないかと思った。
- ・今まではずっと、日本国内の生協の活動内容について学んでいたもので、日本では色々な層の人々に向けた支援やサポートが行われていたり、少子高齢化やコロナの蔓延に伴って、新たな取り組みが行われていたりするのだということを知り、比較的の生協の取り組みは進んでいるように感じていた。しかし、海外ではもっと規模が大きかったり、先進的な取り組みが進められているところもあると知って、まだまだ日本の生協でもできる取り組みや、すべき改善もあるのかなと、海外と比較してみることができた。
- ・今までそういうものだと思って日本の協同組合について学んできたものが、世界と比較した時にそれが当たり前でなく、むしろ特殊であることがあるといった気づきを得ることが出来た。加えてどこかで仰っていたニーズがあればさまざまな協同組合を生み出せるという言葉も印象に残っており、協同組合について考える上で大事なことだと感じた。前半に紹介していただいた世界各国の協同組合、後半紹介していただいたそれらの新たな取り組みについて、どれをとっても目新しい話題が多かった。しかし協同組合の根幹である基本的なあり方に改めて立ち返って、その理念が共通していることを実感する機会にもなった。
- ・環境問題や貧困の問題について協同組合が取り組んでいることが分かりました。国ごとに取り組むべき課題は異なり、それぞれに協同組合の活動内容が異なっていることが印象的でした。SDGsは世界共通で目指すべきゴールであり、共通の課題について提示する意味合いがあります。SDGsの普及により、世界共通の課題について協同組合が率先して取り組んでいるように感じました。今後、協同組合がSDGsに関連したどのような活動を行うかについて興味深く感じました。
- ・世界だと全部で300万ほどの協同組合があることや、世界の雇用の約10%が協同組合から創出されていることに驚きました。また、生協と言えば宅配事業は当たり前だと思っていましたが、今回の講義で宅配事業というものは日本独自の事業であることを初めて知りました。宅配事業を利用するような人の中には、何かの理由で外出できないという方の利用者もいると思うので、世界に誇るべき事業であると思いました。
- ・生協は様々なことを行なっているがそれらを我々が知らないことの方が多い。そこにもっと関心を持たないといけないと思った。

- ・国によって抱える課題や問題意識は違うと思いますが、フードロス問題・植物性食品の販売・プラスチック問題・環境汚染などは世界で早急に取り組んでいかなければならない課題だと思うので、それらの活動に力を入れている国にならって進めてほしいと思いました。地球を一つのコミュニティの場として捉えて大きな協同組合の活動があっても面白いのではないかと考えますし、協同組合の強みを使って新たな切り口が生まれるのではないかなと思いました。
- ・生協の組合員でなければ、生協でも買い物などのサービスを利用することができないのは当たり前のことかと思っていたが、それは日本だけの話であり、多くの海外の生協では、組合員でない人にもサービスを提供していることを学び、非常に驚いた。イギリスの生協では、葬祭事業に深く携わっており、その中には、火葬場を持っている生協もあるという、スイスの生協では、2つの生協がグロサリー市場を寡占しているという特徴等、それぞれの国によって生協の特徴があったことに対して、興味深く感じた。
- ・海外にも生協があることは知ってはいたが、ヨーロッパはフランスとドイツ以外は基本的に大きな生協が存在しているということは初めて知り印象に残るとともに、海外の生協も日本と同じく質の良い安全な物を販売することで地元の方々から支持を得ているのだということを感じた。また、北欧を中心とした国々では食品に限らず様々な分野に取り組んでいるということを知り生協がとても発達しているだということを感じた。日本は環境問題に対する意識が世界に比べて低いということは知っていたが、世界の生協ではより先進的な取り組みをしているのだということに改めて感じた。
- ・講義の中で様々な国の生協や協同組合を知り、とても驚きました。店舗の規模感や、どのような業種があるのか、形態の違いなど、今までの講義で学んだ生協をスタンダードなものだと思っていたため、海外の生協と日本の生協を比較して様々な発見があり、興味深かったです。加えて各国の生協との違いだけでなく、共通点としてプラスチック問題への取り組みがあること等、多くの知識を得ることができました。また、ドイツとフランスの生協が株式会社のようなものに転換しようとして失敗した、というお話にも興味を持ちました。このお話から、生協は生協としての明確な役割が社会の中で与えられているということを感じました。地域の中から生まれたニーズがその国ならではの生協を創り出し、それが生協の本来の目的通りの機能をしているからこのような結果になったのかと思うと、そこから得られる、生協にとって大切なものとは何かという情報が多いのではないかと感じました。
- ・ヨーロッパ諸国、特に北欧の方は、社会福祉制度が整っている印象が強く、それらは行政のはたらきによるものだと思っていましたが、イギリスの保育事業のように生協も様々な事業に展開していることに驚きました。また、環境問題にも積極的に働きかけていることを学び、一定の基準が設けられていることに対して、生協が規定以上のことをするからこそ、それが当たり前となり、結果として社会全体の基準をよりよいものにしているのだと感じました。一般企業に任せておくだけでは改善されない、注視されないとこも、生協が取り組んでいくことで、他の企業が追随することができるのだと思いました。
- ・これまで講義内で学んできた日本国内の協同組合は私たちの食に必須の農業や漁業を支えたり、地域の高齢者への介護や宅配等、様々な形で影響を与えていましたが、海外の協同組合は国民の生活により深く根付いているように感じました。これには、組合員でなくとも組合を利用できる海外の協同組合の形が関係していると思います。しかし、今現在の私には必ずしもそれが良いことなのか判断がつかないため、それぞれの違いについて考えていきたいと思っています。

以上